

7月の技術対策（水稻）

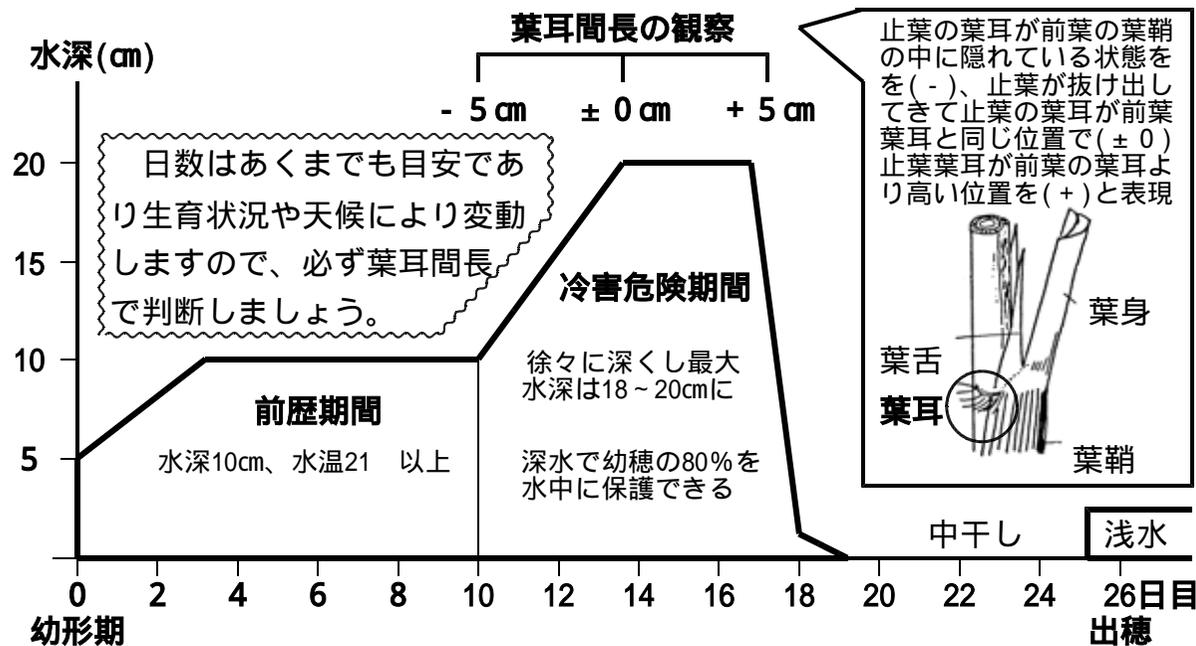
平成16年7月1日
 JAきたそらち・JA北いぶき
 空知北部地区農業改良普及センター
 雨竜西部地区農業改良普及センター

1 幼穂の発育段階に応じた水管理で不稔を防止しよう！

～不稔の多発は減収ばかりでなく、蛋白の上昇＝食味の低下に直結

(1) 葉耳間長 - 5 ～ + 5 cmの期間(冷害危険期)は「守り」の水管理

この期間の低温は、花粉が退化したり発育不全となり充実花粉数の減少につながります。主茎の葉耳間長が - 5 cmになったら幼穂長にあわせ徐々に水深を深くし、最大水深は18～20cm程度を保ちます。80%程度の茎の葉耳間長が + 5 cmになるまではこの状態を保ち、低温から幼穂を保護する守りの水管理を徹底します。



なお幼形期以降も通常の水深で管理、低温注意報が出たからと慌てて深水にしようと一斉に入水すると地域全体の用水量が不足します。また、水温も上昇しておらず十分な保温効果は期待できません。幼形期に達したら冷害危険期が終了するまでの間は深水管理を継続するようにしましょう。また入水は日照が期待できる日の夜間～早朝に実施、日中は止水とするなど水温上昇に努めましょう。さらに畦漏水の防止を徹底することも大切です。

(2) 危険期終了後は根に活力を

80%程度の茎の葉耳間長が + 5 cm以上に達したなら、出穂直前までの間に中干しを実施し根に酸素を供給し活力を与えましょう。このとき併せて5～10m間隔で溝切りを行い短期間で中干しを終わらせましょう。溝切りは登熟期間の走り水や、収穫期に向けたほ場乾燥がスムーズに行えるようになる利点もあります。

2 病害虫防除～予察に基づいた的確な対策を！

いもち病とカメムシの防除体系例

(基幹防除) (臨機防除)

対象 病害虫	場所	6月		7月		8月	
		下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬
いもち病	水田	(水面施用剤の散布) (過去にいもち病発生水田)	又は (予防剤の茎葉散布)	出穂期	出穂期後 7～10日 (発生状況)		
カメムシ	水田			出穂期	出穂期後 7～10日		
	畦畔			← 雑草刈取り →			← 雑草刈取り

【いもち病】

(1) 過去に発生した水田でいもち病薬剤の育苗箱施用をしていない場合や、「ほしのゆめ」・「ななつぼし」作付田でいもち病の発生が懸念される場合は、遅くとも7/5までに水面施用剤を散布しましょう。水面施用剤が使用出来なかった場合は7/10～15頃に予防剤の茎葉散布の実施を検討してください。

(2) 例年発生しやすい水田を重点的に観察し、発生を確認したら5～7日間隔で防除を行いましょう。予察にあたっては、病害虫防除所が出している発生予測システム(BLASTAM)のデータも参考に、近隣で感染好適・準好適日が確認された日の7～10日後に、病斑がないか1筆につき1畦10m×4所を調査しましょう。

病害虫防除所へメール <http://www.agri.pref.hokkaido.jp/boujoshou/index.html>

(3) 被害の大きい節いもち、穂いもちの感染防止の為、出穂期まで発生が認められない場合でも出穂期頃の防除は必ず実施しましょう。

【カメムシ(アゲハミドリカミキリ)】

(1) 出穂前(7月15日頃まで)までにカメムシの産卵・生息場所となる畦畔や農道、水田周辺の雑草地等の2回目の雑草刈りを実施して下さい。

(2) 第1回成虫発生期(6月後半から7月前半)に畦畔すくいとりで平均5頭以上捕獲された場合や、第2回成虫発生期(7月後半から8月前半)に畦畔すくいとりで平均23頭以上の場合は3回以上の本田防除を実施する準備をしましょう。

(3) 水田への飛び込みが集中する出穂期とその7～10日後は必ず防除しましょう。

(4) 2回の基幹防除後、水田内のすくい取りで2頭以上(ほしのゆめは1頭以上)捕獲された場合は補完防除が必要となります。(高温年は下表にて補正)

	出穂の遅速の平年比				気温(加害期間平均)の平年比				
	10日早	5日早	平年並	5日遅	+3	+2	+1	±0	-1
斑点米率	1.97	1.40	1.00	0.71	2.61	1.90	1.37	1.00	0.73
換算係数	0.5	0.7	1.0	1.4	0.3	0.5	0.7	1.0	1.3

例1 出穂期が平年より5日早い場合

2頭×0.7(換算係数)=1.4頭以上で防除が必要と判断する

例2 出穂期後30日間の気温が2 高いと予想される場合

2頭×0.5(換算係数)=1.0頭以上で防除が必要と判断する

減農薬栽培等で栽培基準が決まっている場合には、定められた薬剤を使用してください。